



第 31 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成11年4月7日

CONTENTS

自立と自覚のすすめ	分館長	中沢 賢	(2)
私の読書遍歴	機能高分子学科	近藤慶之	(4)
分館通信 告知板			(14)
	分館日誌		(16)
編集後記			(16)

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。
URLは <http://shinlif1.shinshu-u.ac.jp/online.html> です。

自覚のすすめ

分館長 中沢 賢

Library の本号を皆様が手にされる頃は常田キャンパスには木蓮の花が咲き、フレッシュな新2年生の姿が彩りを添える季節となっていることでしょう。4月の常田キャンパスは旭キャンパスほどの華やかさはありませんが、木々が芽吹き落ち着いた新鮮な雰囲気になります。2年生の諸君の中には、専門に向け心機一転決意を新たにしている方も多くと思います。皆さんはこれから専門の勉強の心構えや方法などについて方々で指導を受けることになるでしょう。図書館の使い方などについても同様に指導を受ける機会があると思います。大学での専門の学習における図書館の意味については前に Library の19号に書いておきましたので、必要に応じそれを参考にしてください。こうした専門教育の勉強法を身につけることはもちろん大切ですが、私はそれ以前に皆さんに心がけて欲しいことがひとつあります。それは「皆さんが自分流の人生観を確立し、自覚と信念を持って充実した大学生を送って欲しい」ということです。4年生から就職や進学の相談を受けるとき、しばしば自分の将来に対する考えが曖昧であったり、本人の本当の興味が不明であって、驚かされることがあります。また授業に長期欠席をしている学生を呼びだして話を聞いてみると、自分の人生や生活に対する信念がつかめず、興味と希望を見いだせず無気力になっていることがわかり、考えさせられることがあります。若いときは人生や社会について真剣に悩むのが当然で、その中から借り物でない本当の自分の生き甲斐となる興味と信念をつかんで欲しいと思います。これからは特に自分独自の人生観、社会観が必要な時代になると考えます。人生や社会について考えるには、読書が大切だと思います。私のお薦めの書籍を以下に挙げておきます。

●「大学でなにを学ぶか」 加藤諦三 光文社

自分の大学生生活に失望したり、興味を失っている学生にすすめたい。

「たとえ第2志望であっても、敗北者などではない。しかし、もし大学を卒業するとき、この4年間はすばらしかったと思わなかったら、そのときこそ、青春の敗北者だろう。」

「僕がここまでダメな人間になった原因は、自分のエネルギーを、何か他人のために使うということを当時あまりしなかったからである。(略)他人のために何かするという行為が、その人の生に意味を与えるのである。」

●「生き方の研究」 森本哲朗 新潮社

古今東西の19人の先人の生きざまについて評論している。題名はハウツーものを連想させるが、内容はむしろ、哲学的である。

トロイヤ遺跡発掘のシュリーマンについては、子供の頃の夢の実現に向かう「意志と情熱」が書かれている。彼は発掘のための資金を調達するため14歳から働いてやがて大実業家になる。この間彼は発掘や考証に必要なトルコ語、アラビア語を含む18カ国語をマスターしている。34歳の時、ギリシャ語と古代ギリシャ語の習得に乗り出す。あまり早くからギリシャ語に取りかからなかったのは、「それを始めると、古代ギリシャの世界の魅力が強すぎて、実業に身が入らなくなる恐れがあったため」と彼はいう。41歳の

時、機熟せりと見て、順風満帆の商会をたたみ、ホメロスの世界に踏み込んでいく。

陶淵明については社会的には成功とはいえない人生のひとつの在りようを示している。陶淵明は地方の教育長、武官、県令などを勤めるがいずれも長続きせず、41歳の時「帰去来の辞」を書いて一切の地位と名誉に決別して田舎に帰ってくる。彼は拙劣きわまりないおのれの生きざまを自嘲しながら、じつは、このようにしか生きられないわが身を自負し続けたのである。

●「奪われし未来」シーア・コルボーン、ダイアン・ダマノスキ、ジョン・マイヤーズ著 長尾力訳
翔泳社

本書は、多様な合成化学物質が、ホルモン分泌系の繊細な作用をどのように混乱しているか、またそれが人類を含む生物の未来にどのような衝撃的な影響を与えるかをわかりやすく鮮やかに描いた研究報告であり、啓発の書である。

コルボーンは野生生物への合成化学物質の影響に関する膨大な科学文献を調べ、それよりある種の合成化学物質が、性発達障害や生殖異常に密接に関わっていることを明らかにしてゆく。私はこの方面の専門的な知識がないので、本書の専門的な観点からの評価はわからないが、若い皆さんが今後取り組まなければならない深刻な課題を提示していることは確かであろう。本書は研究の大切な方法を知る上でも、社会における科学の使命を考える上でも参考となる。

●「夜と霧」ドイツ強制収容所の体験記録 V・E. フランクル著 霜山徳爾訳 みすず書房

この翻訳本は初版が1961年でかなり古いが、1996年に第20刷がでており、内容は色あせてはいない。まず当たり前人間が組織の力で、かくも悪くなりうることを知り暗澹たる思いに閉ざされる。虫けら以下に扱われ犠牲になった人達になんの罪があったわけでもなく、自分の信念に殉じた訳でもない。ただただ不条理に一切を奪われたのである。あらゆる哲学も宗教もこの前には無力のように見える。心理学者であるフランクルは、すべてを否定された極限状態において、肉体は絶望的な状態にありながら、知的な観察と分析を続け、その精神は生きる意味を見出そうともがいて希望を捨てていない。私はそこに悲しくも高貴で真に自由な魂を垣間見る思いで絶句する。彼が血を吐くように語る言葉は、闇の世界ゆえにことさらまばゆい光彩を放っている。ある氷つくような未明、作業現場に向かう惨めな行進の折り、彼はふと、生きていくと信じる妻の面影に照らされる思いに満たされる。

「その時私の身をふるわし私を貫いた考えは、多くの思想家が叡智の極みとしてその生涯から生み出し、多くの詩人がそれについて歌ったあの真理を、生まれて初めてつくづくと味わったということであった。すなわち愛は結局人間の実存が高く翔り得る最後のものであり、最高のものであるという真理である。」

●「ご冗談でしょう、ファインマンさん」I, II ノーベル賞物理学者の自伝
R・P・ファインマン著 大貫昌子訳 岩波書店

茶目っ気たっぷりなノーベル物理学賞受賞者の随想記である。知的好奇心が如何に科学にとって基本的であるか、またそれが如何に人生を豊かにするか、を今更ながら感じた。私はあらゆるジャンルの書籍の中で痛快な本を一冊あげろといわれれば躊躇なく本書をあげる。ファインマンの人間味と科学者の鋭い眼が感じられ、単なるおもしろおかしい話で終わってはいないところがすごい。

編者注：これらの図書は、繊維学部分館にあります。是非、一度手にとってみてください。

私の読書遍歴

(3)最近、感銘をうけた本ア・ラ・カルト(à la carte) その2

機能高分子学科 近藤慶之

朝日新聞の“天声人語”に目を通すようになってから 30 年以上にもなります。最近はいんターネットの画面上で情報を得ることが多く、文明の利器とでも申しましょうか「いちもくりようぜん」で、かなりお気に入りの文面が出てくるとプリントアウトしてファイルにすることもあります。それは、その時のトピックスやらあらゆる世相が反映されていて、まさに、日本はおろか世界中の出来事の縮図でもあり、とても興味があります。

書き出しから脱線しておりますが、もう少し道草をくわせて下さい。

平成 10 年 12 月 31 日の“天声人語”。つばい壺井栄に「母のない子と子のない母」という作品がある。亡くなった木下恵介さんは昔、この本の映画化をもくろんでいた。ところが、ほかの監督に先を越された。口惜しがっていたら、同じ作家の「ひとみ二十四の瞳」を薦める人がいた。読んだ木下さんは、すぐ壺井さんに電報を打った。〈エイガニシタン〉。9月に死去した黒沢明監督が「世界のクロサワ」なら、木下さんは堂々たる「日本の木下」だった。…………

7年前、78歳で文化功労者に選ばれたとき、語った。「大衆といっしょに、幸せを願って映画を作ってきたと思いますが、この年になると、自分は幸せというものをどういう意味で考えてきたのだろうか、と考えます。惜しまれつつ、今年もたくさんの方が去った。この季節、いつも中桐雅夫の詩を思い起こす。〈新年は、死んだ人をしのぶためにある。／心の優しいものが先に死ぬのはなぜか、／おのれだけが生き残っているのはなぜかと問うためだ、〉

プロレスの 209 cm、16 文キックのジャイアント馬場さんが亡くなったのはついこの間のことである。あの大きなからだ身長、超特大の足けりで我々を大いに楽しませて下さったので残念でなりません。生涯現役で幸せな 61 歳であったようですが、〈生きていてよかったなあ〉というように思い、皆に惜しまれての死は、まさに永六輔の言う“大往生”であった。生涯現役といえばプロ野球の名物監督、野村さんをあげたい。私は子どもの頃からジャイアンツの大ファンで川上、千葉、藤本、別所、青田から長嶋、王、江川、原、吉村、さらには桑田、清原、高橋と、あげたら好きな選手がいっぱいおります。「静」の野村の“月見草”と「動」の長嶋の“ひまわりの花”で因縁 40 年のライバルであります。今年から阪神の監督をやるようになり「強制という感覚ではだめ。鍛練と習得以外の何ものでもない」。例年になく意欲的な新庄選手に、野村・阪神の改革の一歩がみえた。今年のペナントレースはパ・リーグの松坂選手の加入、セ・リーグの“ノム”さんにより面白くなりそうです。大相撲では久々に強い大関、千代大海関の誕生で活気がもどってきました。あまり面白くもない若・貴(不)人気にいや気がさしていた人達は喜んでいることでしょう。私は新大関が好んで色紙に書^しく言葉、

『父ありて我が強さあり、母ありて我がやさしさあり、父母の姿、いつも忘れず、
我が心のささえなり』

は大好きな言葉です。子供の頃は手のつけようもない“ツッパリ”の男の子だったそうですが、よくぞまあ、ここまで「心・技・体」の成長があったものと感心致しました。子育ても学生の教育も指導の仕方によってはこれほどまでに大きく変わることを思い知らされました。

年明けにテレビ番組で“益子焼”（栃木県益子町）のことが放送されていて、とても興味がかれました。“流し掛け”の技法で有名な世界的巨匠、浜田庄司氏（益子焼きの陶芸家）は 84 歳で亡くなるまで生涯現役をつらぬかれた立派な人でありました。昭和 22 年に昭和天皇が行幸のみぎり、皆川ます女（82）の陶芸をご覧になり、「益子焼」と題して、天皇陛下がお詠み遊ばされた歌が命名のもとになったようです。

さいもなき 嫗おんなのゑがくすゑものを

人のめつるもおもしろきかな（昭和天皇）

行幸：天皇の外出旅行

嫗：老女

すゑもの：陶物

この辺で感銘をうけた本に入りましょう。今、詩人で書家の相田みつをがブームになっています。それはなぜでしょう。東大名誉教授の木村尚三郎先生の言われるには、20世紀の科学技術の飛躍的な発展が我々の“感性”を鈍らせてしまったと問いかけています。来るべき21世紀には“簡素美”に生きがいを求め、もっともっと“心の豊さ”を追い求めてゆかねばならないと考える。月刊雑誌「ゆほびか」1999年、3月号に相田みつをさんの特集があります。“心が癒えると評判のぬくもりの書家「相田みつを」は読む薬”。相田みつをの書は人が生きることを真摯しんしに考えさせてくれる日々の心の糧かて（みさき病院内科科長、有働尚子うどう なおこ）。炎のストッパー・津田恒美投手（元広島）の壮絶な“ガン”との闘病生活を支えたのは相田みつをさんの「道」と「本音」という二つの詩であったようです。

吐くのは人間追いつめられて
その時どんな本音を吐く
それが大事

「本音」

根がふかくなるのは
人間としてあの時のちの
そしてなあその時なんだよ

涙ただ黙って
黙って歩くんだよ
ただ黙って
見せちゃダメだぜ

愚痴や弱音を吐かないで
だまって歩くことだな
そんなときはその道を

というものがあんなあ
ならぬ道
どうしても通らなければ
長い人生にはなあ

「道」

東京銀座に息子さんが記念館を建てられ、館長さんをされているそうですが、入館者が
増えていると聞いております。私も、そのうちに行ってみようと思います。相田みつをさんの
世界にふれようと思ったら、文化出版局から出されている次の書物がよい。「にんげんだもの」、
「一生感動一生青春」、「雨の日には……」、「しあわせはいつも」などがあげられます。

階成社から出版されている星野富弘さんの「かぎりなくやさしい花々」は感動的です。詩
と絵をとおして生命のすばらしさを語りつづける感動の記録であります。野の花々が手足の
不自由な私に生命の尊さを教えてくれましたとおっしゃる星野富弘さんの絵もすてきです。

しま った	小さ くな って	私は 花よ りも	見つ づけ てい たら	花を おい て	顔の 横に	「ス カシ ユリ 」	また 起き あが るの さ	空を なが め	しば らく	ひま だっ たら	その 時も し	たお れて も	弱い から 折れ ない のさ	ちい さい から 踏ま れる のさ	「ハ ハコ グサ 」
----------	----------------	----------------	----------------------	---------------	----------	---------------------	---------------------------	---------------	----------	----------------	---------------	---------------	----------------------------	----------------------------------	---------------------

星野富弘さんの著書はどれをとっても皆“ステキ”です。「鈴の鳴る道」は、これから読もう
と思っていますが多分、素晴らしい本でしょう。

ここで、ちょっと詩や歌の世界に入ってみます。
詩人の茨木のり子さんは“いい詩はわかりやすいのだ”。長田弘さんは“いい詩には、ひと
の心を解き放ってくれる力があります。いい詩はまた、生きとし生けるものへの、いとおしみ
の感情をやさしく誘いだしてもくれます”、と。ここで、思いつくままに、いくつかの短歌や詩を
紹介しましょう。

よく信州は水が美しい、山が美しい、そして緑が美しいと誰もがいいます。

きりふかき しなののくにに こほろぎの
あそばむ庭を われとつくらむ (室生犀星)

いくつかの詩を口ずさんでみたい。

「私のいのち」 近藤裕（医者） 作

世界中にたった一つの私のいのち
たった一度の、この世に生きる私の人生
だから私のいのちを大事にしたい
私のからだとところを大事にしたい
人とのつながりを大事にしたい
病を克服し、いやしを求めたい
私のために
私を愛してくれる人のために
愛することのできる私であるために
たった一度の病でも大事にしたい
病むからだ ころから学びたい
私のために
私を愛してくれる人のために
愛することのできる私であるために
かけがえのないいのちだから
愛しい私のいのちだから

「青春とは」 サムエル・ウルマン 作

青春とは
人生の特定の時期を指すのではなく
心のありかたを言うのだ
年齢を重ねるだけでは老いはない
青春とは紅顔と若い唇 強い脚力の問題ではなく
強い意志と高い理想 熱い情熱を言うのだ
青春とは 将に 生命の深い泉から湧き出する
新鮮さを意味するのだ。
青春とは 遙巡ようしゅんに打ち勝つ激しい勇氣
安易に流れる心を自制する意志を意味する
時には二十歳の青年よりも六十歳の人に青春がある
理想を失った時 初めて老いる。
歳月は皮膚にしわを増すが
情熱を失う心にしわがいく
悩み 恐怖 自失は心をまげ 精神を芥あぐたへ落とす。
年が六十であろうと十六であろうと
心に美しさ 希望 歡喜 勇氣 活力を持つ限り
その人は青春にある。

遙巡ようしゅんはるかめぐり歩くさま
芥あぐた…ごみ・ちりの意

森田公一さんの「青春時代」という曲があったっけ？

「卒業までの半年を何ではかればいいのだろう……

青春時代の真ん中は道に迷っているばかり……

青春時代が夢なんて あとから ほのぼの思うもの……」

といった歌詞でシンガー・ソング・ライターの森田さんがピアノをひきながら歌ったのはもうウン十年前でしたよね！

「機能高分子学科」は20年前、繊維学部にて6番目の学科として創設されました。昭和55年に2年次生として学部に進級してきた一期生に、秋の大学祭で行われる仮装行列の前にする「団長の舞い」のときの歌詞を作って下さいと学科の女子学生から頼まれて、煽てにのって即興で作ったのが次の詩です。今にして思えば“まあまあ”でしょうか。

「雄渾の舞踏」

ああ！

浅間にたなびくは

怒濤の噴煙

千曲に曲折するは

清涼の流路

みよ！

幸村・紬里に花咲く

夢はロマンの機能高分子

いざ！舞わんかな

雄渾の舞踏

近藤慶之 作詩

振付は(故)小山長雄先生

元繊維農学科 教授

雄渾 雄大なこと
清涼 清いこと
幸村 真田幸村
紬里 上田紬

「涙をぬぐって働かう」

三好達治 作

みんな希望をとりもどして涙をぬぐって働かう
忘れがたい悲しみは忘れがたいままにしておこう
苦しい心は苦しいままに
けれどもその心を今日は一たび寛^{くろ}がう
みんな元気をとりもどして涙をぬぐって働かう

最も悪い運命の颱風の眼はすぎ去った
最も悪い熱病の時は去った

すべての悪い時は今日はもう彼方に去った
楽しい春の日はなお地平に遠く

冬の日はまだ暗い谷間をうなだれて歩みつづける

今日はまだわれらの暦は快適の季節に遠く

小鳥の歌は氷のかげに沈黙し

田野も霜にうら枯れて

空にはさびしい風の声が叫んでいる

けれどもすでに

すべての悪い時は今日はもう彼方に去った

かたい小さな草花の蕾は

地面の底のくら闇からしずかに生まれ出ようとする

かたくとざされた死と沈黙の氷の底から

希望は一心に働く者の呼び声にこたへて

それは新しい帆布^{ほふの}かかえて

明日の水平線にあらわれる

ああその遠くからしずかに来るものを信じよう

みんな一心につつましく心をあつめて信じよう

みんな希望をとりもどして涙をぬぐって働かう

今年のはじめのこの苦しい日を

今年の終わりのもっと良い日に置き代えよう

私は学生時代から、なぜか谷川俊太郎が好きであった。最近「よしなうた」(1991年、青土社発行)などを読んだ。この間、^{ぎんいろなつお}銀色夏生(女性)の本が生協にも置かれていたので、「気分よく流れる」(角川文庫、平成10年8月発行)、「恋が彼等を連れ去った」(幻冬舎文庫発行)などを買って読んでみた。何気なく、楽しく風流で心をなごませてくれるので一読をおすすめする。このあたりは次回(4)で紹介したい。

ふつうの本にもどります。

『心にのこる言葉3』(小野寺健著, 河出書房)は 1995 年5月に初版発行されました。世界中の作家、詩人、政治家、歴史家などの著名な言葉 80 が英語と日本語を並べてのって、その言葉の本来の意味を詳しく解説されていて教訓本とも言える立派なものです。

『心にのこる言葉1・2』も生きる勇気と知恵を与えてくれる人生の小さな歌、愛のことばです。1～3はすべてベストセラーとなっております。二、三そのまま引用しますと、

「本ほど美しい家具はない。」

(No furniture so charming as books.)

シドニー・スミス(イギリスの随筆家)

「音楽、人の知るもっとも美しいもの、この世の唯一の天国。」

(Music the greatest good that mortals know, and all of heaven we have below.)

ジョセフ・アディソン(イギリスの随筆家)

「笑えば世界もいっしょに笑うが、泣くときは一人。」

(Laugh and the world laughs with you; Weep, and you weep alone.)

エラ・ビルコックス(アメリカの詩人)

『夢は、つづいているかぎり現実である。そして、われわれは夢のなかで生きているのではないか。』

(Dreams are true while they last, and do we not live in dreams?)

アルフレッド・テニソン(ヴィクトリア朝イギリスを代表する大詩人の一人)

『生きるというのは、愛するのに似ている。理性は全面的に反対するのに、健康な本能が全面的に支持するのだ。』

(To live is like to love-all reason is against it, and all healthy instinct for it.)

サミュエル・バトラー(イギリスの作家・思想家)

『日本一心に残る愛のことば恋のことば』(日本ことば研究会編、三心堂出版)は 1995 年4月に初版発行されました。小説、エッセイ、詩、漫画など、日本の近、現代を代表する 31 人の作品から選び収録されています。心情あふれる珠玉のことばの数々に、思わずうなずいてみたり、身につまされたり、ずうっと覚えておきたいなど、さまざまなかたちで共感していただけるのではないのでしょうか。と、あとがきに記されております。

「人生、楽しまなきや、損」

という考えの夫と

「人生、楽しまなきや、損」

という考えの妻

夫と妻

柴門ふみ（「愛こそがすべて」より）

子供より親が大事、と思いたい。

子供のために、などと

古風な道学者みたいな事を殊勝らしく考えても

何、

子供よりも、その親のほうが弱いのだ。

親と子

太宰治（「桜桃」より）

殊勝 けなげなさま

失ったものに

びわの花が咲いたら

もも山のももが咲いたら

はらんきようが小指の先になったら

おまえたち

もどってきてくれ

わが子へ

山田数子（「失ったものに」原爆詩集より）

こころ

お母さまは

大人で大きいけれど。

お母さまの

おこころはちいさい。

だって、お母さまはいひました。

ちいさい私でいっぱいだって。

お母さま

金子みすゞ（「こころ」より）

最後に、教訓の本を3冊ほど。

『小さいことにくよくよするな！』（リチャード・カールソン著、小沢瑞穂訳）は1998年6月15日初版発行、サンマーク出版で私は第19刷の発行本を入手しました。最初に、「はじめ」として書かれていることは、

————— 人は心のもちようで人生を変えられる。これは私の世代の最大の発見だ。（ウィリアム・ジェームズ）

胸に当たるもつともなことが100項目も書かれており、これらをすべて知りつくしたら、それこそ胸がいっぱいやぶれそう!!

心理学者で臨床セラピスト、ドクター・リチャード・カールソンが書いた本書「小さいことにくよくよするな！」（原題:Don't Sweat The Small Stuff）は、なぜアメリカでこれほど読まれているのだろうか。一つは、私たち現代人が、心穏やかな暮らし方とはほど遠いストレスまみれの日常を送っていること。もう一つは、アメリカ人が個人セラピーを日常に取り入れて暮らしていること。この本の特徴は、百の戦略のうちどこから読んでもいいことだ。一日一ページ読めば百日に読み終ることができ、どの戦略も観念的、説教的ではなく実際的なところは五木寛之の『生きるヒント1～5』に共通点があります。本書は全米で五百万部のベストセラーになり、世界三十カ国で翻訳されており、日本でもじきにミリオンセラーになることうけあいです。1998年11月20日に第1刷発行の『あくせくするな、ゆっくり生きよう！』が主婦の友社から発行された。著者はリチャード・カールソンとジョセフ・ベイリーの共著で、大沢章子さんが訳されています。人生に不満を持たない生き方のヒントとして、これこそ、いつの日か「ゆっくり読もう！」をあい言葉として必読をおすすめしたい。

『^{たりき}他力』（五木寛之著、講談社）は1998年11月20日に第1刷として発行されました。少し、理解しにくい言葉などが出てまいります。ゆっくり何度も読み返しますと、益々、味のある奥の深い書であることは間違いのないようです。著者の言葉ですが、＜他力＞とかいて、＜たりき＞と読みます。よく＜他力本願＞などと安易に使われますが、じつはこの＜他力＞は、出口なき闇の時代にギラリと光る、日本史上もつとも深い思想であり、すさまじいパワーを秘めた＜生きる力＞です。私も、もう4、5回読み返す必要があるものと考えております。

おわりに、出典もわからず誰の言葉かもよく理解していませんが、教訓の言葉で好きなものをあげます。



続く

次回(4)のテーマは、私の好きな詩人、歌人、俳人です。

♪♪♪ 分館通信 ♪♪♪

告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。
次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板や繊維学部分館ホームページ(<http://shinlif1.shinshu-u.ac.jp>)でご案内していますので、そちらをご覧ください。

⇒ 図書館オリエンテーションについて

- 〇〇について書いた本を探しているのだけど図書館のどこにあるの？
- ××について調べたいのだけど何で調べたらいいの？
- 図書館にある端末やカードは何をするためのもの？

図書館を利用する際、図書館の利用方法や図書(文献)の探し方について疑問に思ったことはありませんか？目的の本が見つけれない、図書館にある設備の利用方法がわからず使えなかった、といった経験は誰にでもあるのではないのでしょうか。

図書館の有効な使い方を知ることは、学習・研究に多いに役立ちます！

そこで、図書館では特に新2年生の方を対象に、主に図書館内の設備の案内・図書館で行っているサービスの説明会を行います。松本の中央図書館とは多少異なる点もありますので、是非、参加してください。実施時間は以下の通りです。

*** 参加される方は、開始時刻までに **図書館2F会議室** にお集まり下さい ***

4/12 (月)	4/13 (火)	4/14 (水)	4/15 (木)	4/16 (金)
	9:30~			9:30~
13:30~			13:30~	
		15:00~	15:00~	15:00~

* 所要時間は30~40分ほどです。

また、希望者(グループ)・講座を対象に、ご希望に沿った内容のオリエンテーションも行いますので、繊維学情報係(内線:5015、担当:武田)にご相談ください。

⇒ Swet Scan について

平成11年1月より Swet Scan の提供を始めました。

Swet Scan は、オランダのスエッツ社が提供する、雑誌目次データ提供システムです。

附属図書館では、平成8年から提供してきた Current Contents にかわり、平成11年1月から提供を開始しました。詳しくは中央館のホームページをご覧ください。

URL: <http://shinlis2.shinshu-u.ac.jp/swetscan.html>

⇒ 平成11年度 係員の職部分担について

平成11年度の係員の職務分担は下記の通りです。

担当者	内線	e-mail アドレス	職務分担
峯村係長	5313	tminemu@gipwc.shinshu-u.ac.jp	分館事務総括
大槻修子	5016	sotsuki@giptc.shinshu-u.ac.jp	雑誌の購入、別刷
武田佳代	5015	jfc5101@giptc.shinshu-u.ac.jp	図書の購入、目録 情報システム管理
宮下 綾	5017	jfc1200@giptc.shinshu-u.ac.jp	文献複写(受付)／現物貸借(受付) カウンターでの窓口業務
斎藤 晶	5015	jfc6100@giptc.shinshu-u.ac.jp	文献複写(依頼)／現物貸借(依頼) 雑誌の製本

なお、図書館の利用案内、各種検索端末の操作方法、資料の所蔵確認などは、係員全員が担当しますので、お気軽にお尋ね下さい。

(1月～3月)

- 1/28 第6回 附属図書館運営委員会(SUNS) 出席者—中沢分館長
小西運営委員
- 2/8 第2回 信州大学附属図書館講演会(SUNS)
講師 高山正也氏(慶應義塾大学文学部教授)
『デジタル環境下での図書館・情報サービスのあり方』
出席者—学内教職員
- 2/16 第4回 紀要委員会
- 3/23 第3回 全学図書関係係長会議 出席者—峯村係長
- 3/10 第6回 図書委員会
- 3/25 第7回 図書委員会

編集後記

お昼休みのあたたかでやわらかい日差し、固くとじられていたツツジの芽の緩み具合、ふっくらとしたスイセンの蕾、遅まきながら信州でも季節が変わったと実感できるようになりましたね。そこで今号は、新たなスタートの時期である「春」にふさわしい企画をお届けします。

中沢分館長からは新2年生に向けたメッセージを、近藤先生は毎年恒例(?)となった「私の読書遍歴」シリーズ第3弾をいただきました。どちらの原稿にもオススメ本がふんだんに挙げられているので、「これは！」と心にひっかかる本があったら是非読んでみて下さい。ひょっとしたら人生観が変わる程、衝撃的な感動に出会えるかもしれませんよ。(中村)

春の異動で図書館では、中村重子さんと津田作治さんをご退職されました。

中村さんには、特に Library の編集を、津田さんには夜間開館のお世話をいただきました。お二人への感謝と今後のご健康ご多幸を祈りつつ、また新たな気持ちで新年度を迎えたいと思います。(係長)

次号は7月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思いますので、ご意見・書評など何でもお寄せ下さい。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしております。

E-mail アドレスは、jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp です。